新聞記事

Eindhovens Dagblad

ルネ・ヴァン・ペール(アイントフォーヘン　ダグブラード紙　10/21)

交流展「Nowhere」 アポロハウス　両極が触れ合った日本・オランダ交流展

最も原初的な光の臓器の一つが今月アイントフォーヘンのヴェストヂック通りのスキレンス織物会社の空っぽな建物において見、そして聞くことができる。

日本人アーティスト有地+笹岡は天井の蛍光灯を変圧器に接続し、その結果それらは明るい音を生じさせながら変則的に明滅している。

これはアイントフォーヘンのアポロハウスと東京のICAEE/ギャラリー・サージの共同プロジエクトである「Nowhere」で展示されているインスタレーション作品のひとつである。このプロジエクトは、アポロハウスの15周年記念であり、来春、参加者は東京でも作品展示を行う。

双方の責任者である、ポール・パンハウゼン氏と酒井信一氏は、それぞれ候補作家を挙げ、相手側の作家の選択決定をした。参加作家はヴェストヂック通りの使用されていないビルの割り当てられた制作場所でこれまで作品の制作をしてきた。このインスタレーションの集合の結果はすばらしい結合をみせている。時にそれは、二つの文化にかかる橋を形成しているようにも見えるが、それは同時に、簡単には左右されない堅固なものにもなり得ている。

シルク・ストリング

水嶋一江の作品は、ポール・パンハウゼン氏の作品の関心に近いものがある。この女性作家は絹糸を空間に張り巡らせている。彼女はこれをカリグラフィと呼んでいるが、日本の書道とは違うと否定している。糸は反響板の役割をしている紙コップを通っている。それによって、一見、繊細にみえるインスタレーションから演奏時には力強い音が生み出される。演奏は手袋をはめてなされる。

フース・クーンアラーツの作品は、背反しあう二つのオブシェから成り立っている。それはマケット的な二つの空間を彷彿させる。 この二つのオブシェはフィットするだけではなく、青と黄という補色が施されている。これらの色彩は、作品が置かれて隣接する二つの部屋の壁面にも施されている。かたちの張り詰めた明るさと空間に施された色彩は、関連しあっているようにも見えると同時に背反しあいながら作品空間の緊張を高めている。これらは日本のアートにも起き得る要素である。これらの作品の注目すべき点は、使われている技術の多様性と、非常に異なった空間の力の放射である。これは、「Nowhere」を単なる作品のコレクション以上のものにしている。酒井氏が12の環境と言及した所以でもある。場所と作品は、切り離して見ることはできない。それは、この展覧会にインスピレーションを与える場としての建物と同時に、それぞれ別れたスペースにも言えることである。

シンポジウム

15周年の為に、アポロハウスは今週コンサート、パフォーマンスを企画している。さらに来週の月曜日にはシンポジウムが開催され、同日、この美術機関の最新の出版物の披露がある。会期中、会場にはアポロハウスの写真家ペーター・カールスによる、過去5年間のアポロハウスによって紹介された日本人パフォーマーの写真も展示されている。

写真キャプション

有地＋笹岡　「発光するアイントフォーヘン」有地＋笹岡による光りと音の作品

水嶋一江　　糸の作品で演奏する水嶋一江。典型的な東洋的な音は注目に値する。